ふくいミュージアム

1990.9.30
No.18

福井県立博物館

小学単語かるた（明治９年）

秋の特別展

文明開化の光と影

―― 福井県／その誕生期 ――

趣　旨

今回の特別展は、明治前期、まさに福井県が誕生した時代にスポットをあてます。

明治４（1871）年の廃藩置県から近代国家の体制ができあがる明治20年代までを対象に、政府がすすめる近代政策と地域社会の動向を追いかけます。

近代化は実際どのように推進され、人びとはこれをどのように受けとめたのでしょう。また、その過程で失われ犠牲になったものは何なのでしょう。わたしたちの福井県の歴史に映さしだされた「文明開化」の光と影をご案内します。

【展示コーナー】

□　新しい行政

中央集権国家の基盤として、新しい地方制度が整備されました。

明治４年の廃藩置県から同14年に福井県が誕生するまでの過程、さらに、大区小区制の実施から新市町村が発足するまでの町や村の変遷をたどります。

□　「旧習打破」と近代教育

地域の伝統的な生活様式や信仰・習慣が否定され、近代的な国民教育が開始されました。

「耶蘇（やそ）」から真宗を守ることを名目に新政策の実施に反対した大野・今立・坂井郡の一揆と、新設された小学校の実情をさぐります。

□　地租改正と自由民権運動

土地・租税制度を改める地租改正など新政策を強行する専制的な政府に対して、国会の開設を求める自由民権運動が高まりました。

地租改正の実施過程と杉田定一が指導する越前７郡の地租軽減運動、さらに、杉田定一を中心とする県下の自由民権運動に焦点をあてます。

□　交通・通信の発達

近代的な軍備や産業に欠かせない交通・通信の整備が急がれました。

敦賀―長浜間から北陸への鉄道敷設（計画）や汽船・西洋形帆船が導入された陸海交通の発達ぶり、また、ポストや電信柱が登場した初期の郵便・電信事業を案内します。

□　近代産業のめばえ

「殖産興業」をスローガンに、洋式産業の移植や在来産業の近代化がすすめられました。

士族の指導のもとに輸出産業に発展した絹（羽二重）織物業を中心に、牛乳や活版印刷など、士族が着手した新しい産業・商業を紹介します。

□　文明開化の新事物

文明開化を象徴するような新しい事物が国民生活に登場しました。

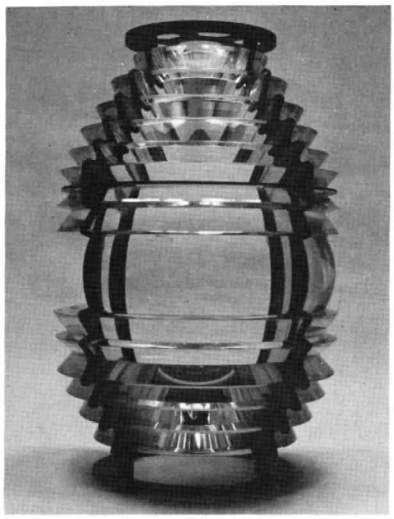
れんが・時計・ランプ・マッチ・カメラ・せっけん・ガラス製品・洋傘・シルクハット・自転車など、さまざまな開化の事物を一覧します。

□　描かれた開化の光景　―開化絵と銅版画―

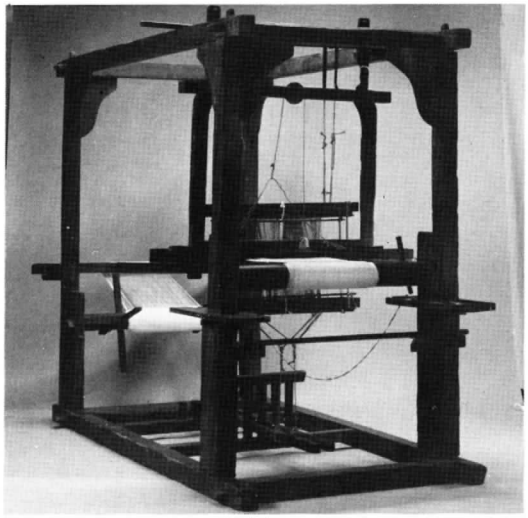
「文明開化」の光景を描いた錦絵（開化絵）や明治20年の県下の町並みを描いた『福井県下商工便覧』（銅版画）を紹介します。

■　**特設：ビデオコーナー**

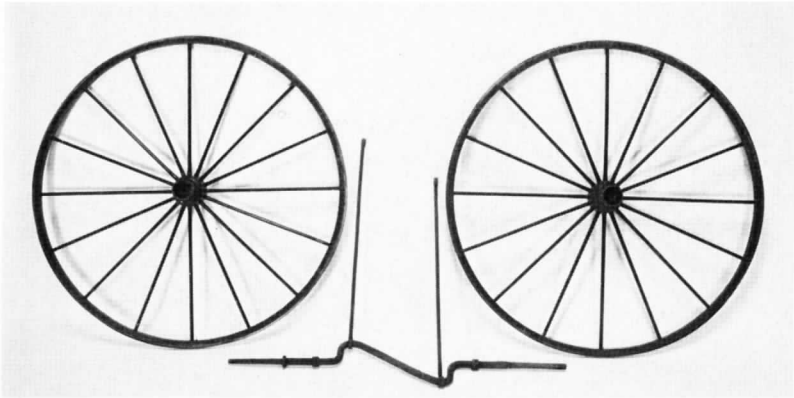
この秋、明治が
おもしろい…



立石灯台のレンズ　（明治13年）



バッタン機　（明治後期）　勝山市指定文化財



自転車（三輪車）の車輪　（明治前期）

冬の企画

2月7日(木)→3月17日(日)

館蔵品展

懸仏（南北朝時代）

博物館では開館以来、本県の自然や歴史・民俗などに関する資料の収集につとめてきました。これらの資料は常設展示や特別展示に展示してきましたが、まだ多くの資料が未公開のままです。そこで、今回の館蔵品展は、今まで収集してきた資料の中で、未公開の資料を中心に、いくつかのテーマをたてて、展示を構成します。

博物館の資料収集にご協力くださいました方々への感謝の気持ちを表すとともに、今後の博物館活動に対する県民のみなさまのご理解とご協力を得ようとするものです。

研究ノート

武生市・横根寺・観音堂・木造千手観音立像について

かつて越前国の国府の置かれていた武生市の市街から北東にやや離れた横根町の小高い山の上に、横根寺観音堂があり、本尊として木造千手観音が安置されている。像は近年武生市教育委員会によって見い出され、平安時代中期にまで遡る作としてすでに市文化財に指定されているが、珍しい形式をもつ像と思われるので、ここに紹介してみたい。

像は像高162.5cmの等身大の像である。

髻部は大きくつくり、頂きに一面、髻上に三面、天冠台上に七面の計十一面を戴く。天冠台は比較的高く、紐一条の上際に列弁文のように縦のノミ跡を並べている。髪際は平彫りとする。面相部は頬が丸く張り、目鼻は細かく刻む。それに比し、耳はかなり大きく特に耳朶は外側に強く反り返る。耳朶は貫かない。三道を刻む。合掌手・宝鉢手と左右各十七本の脇手をもつ。脇手は各三列で前から六・六・五本とする。条帛・天衣・裳をつける。両足をそろえて立つ。(図1)

木心を後方にはずしたケヤキの一材から、頂上面を含む頭躰の大部分を彫出し、合掌手・宝鉢手は両肘で各一材矧付けとし、脇手は合掌手の裏側に縦20cm、横8cm、厚さ10cmの小材をあて、各手を差し込みとする。合掌手から垂下する天衣各別材矧付け。両足先各別材矧ぎ。現状は素地であるが唇に朱、目および髪際・三道などに白土、髪に墨彩がのこる。頭上面のうち髻上斜め左前の菩薩面、天冠台上左側方の奥から二番目の菩薩面および右側方の二面の計四面は後補。合掌手・宝鉢手・脇手とも後補。また背面に縦16.3cm、横17.5cm、深さ12cmの穴を刳り、蓋板をあてるが、蓋板は後補。像低に径4cm、深さ18cmのほぞ穴があけられ、現在は後補の雇いほぞで台座に立っている。

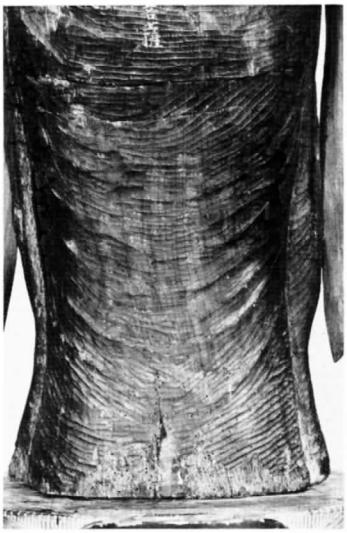
(図1)

本像の表現において注意される点は、まず体背面全体に細かいノミ跡を残すことである。(図2・3・4)ノミ跡は耳後ろを通る線より後方背面に隙間なく細かく残り、像の前面と、背面を明確に区別している。またノミ跡は全面ほぼ同じ幅であるが部位により角度が異なり、かなり意図的である。髻部は天冠台に近い基部ではほぼ横目であるのに対し、上部に向かうほど左上がりの角度を描く。天冠台と髪の部分は横目とするが、襟足では縦に大きくザックリとする跡になる。天衣および背中は横目とする。腰以下になるとノミ目は体の起伏に合わせるように屈曲し、さらには衣文を表すかのように幾条かの波を浮かび上がらせている。体前面両脚部に衣文を刻んでいないことを考えると一層意識的である。この様に明確に前面と区別し体背面にのみ、それもなおざりではなく意識的な表現として、ノミ跡を残しているのは何

(図2)

(図3)

故であろうか。



（図４）

像の体表面にノミ跡を残すことについては既に、久野健・井上正・安藤佳香の諸氏により説かれている。久野氏は滋賀・飯道神社・薬師如来坐像、京都・神応寺・行教律師像をあげられ、ノミ跡を残す像は神仏習合に関係するといわれる（「鉈彫仏像論」『仏教芸術』85）。井上・安藤氏は霊木信仰に基づく造像という概念から、ノミ跡は霊木から仏・菩薩が化現する状態と解釈されている（井上「古密教彫像序説」『論叢仏教美術史』、安藤「勝尾寺薬師三尊像考」『仏教芸術』163）。筆者はかつて、越前の神体山・日野山の神木（霊木）による造像と思われる本地仏を紹介した際に、やはり体全面にノミ跡を残していることを報告した（「武生市荒谷町観音堂聖観音菩薩立像について」『ミュージアム』449）。ここでは一応神仏習合に関係する可能性をあげておこう。

次に指摘しなければならないことは頭上面についてである。頭上面は後補のものを除いて彫出とするが、それらは粗く刻み、未完成のようである（図５）。特に頂上面は面相部のみを彫出し、わずかに目鼻を刻むようであるが、肉髻は作らずただ髪を長く垂らして両耳を蔽う形となる。

（図５）

頭上面については、千手観音も十一面観音も同説で、頭上の十一面は方便の面、眞面は真実の面で、「是れ真実方便一雙なり」とされ、また頭上面のうち、頂上の仏面は果、他の面は因で「是れ因果一雙なり」とされており（『十一面神呪心経義疏』）、通常頂上面が仏面以外であることは考えられない。ところが、数は少ないものの本像のように頂上面を仏面としない像が存在する。管見では滋賀・大岡寺・十一面観音立像（図６）、兵庫・大川瀬観音寺・十一面観音坐像、新潟・宝伝寺・十一面観音立像、神奈川・弘明寺・十一面観音立像、長野・知識寺・十一面観音立像、岩手・天台寺・十一面観音立像、秋田・小沼神社・十一面観音立像二躯、岐阜・神通堂・十一面観音立像などがあげられる。

（図６）

これらのうち、神奈川・弘明寺像、新潟・宝伝寺像は既に「鉈彫り像」として著名である。長野・知識寺像は最も古様を示す「立ち木仏」として知られているが、所々にノミ跡を残す。岩手・天台寺像、新潟・長谷像もわずかながらノミ跡を残している。兵庫・観音堂像は、背面の裳の衣文を墨書しており、本地仏と思われる。このようにこれらの像は、通常の仏像とは異なるように思われる。田中恵氏は秋田・小沼神社像に関して、日本の固有信仰との関わりを指摘されているが（「秋田県の仏像」『仏像を旅する―奥羽線―』）、横根寺像もそのように考えた方がよいのかも知れない。

（長坂　一郎）

〔付　記〕

本稿稿了後の平成２年９月27日夜、横根寺・観音堂は原因不明の失火により延焼し、本尊の千手観音像も焼失した。貴重な文化財を失うことは誠に残念な事である。本像が失われた今、本像についての詳しい報告を成すことが調査者の義務と考える。成稿を期したい。

資料紹介

本県初記録のイヌタデ属2種

＜ヤナギヌカボ＞ 本種は北海道・本州・四国の湿地や水辺に自生するが、全国でも比較的少ないもので、同属の食用とするヤナギタデ（マタデ）に比べて全体に葉が細く、両面に短毛がある。花期は秋で、細い穂状様の花穂をつける。花被にはヤナギタデのような明瞭な腺点がなく、葉を噛んでも辛味がないので区別される。1986年10月10日、敦賀市樫曲の湿地で、ヤナギタデの群落と相接して群生しているのを採集したもので、京都大学の村田源先生により同定された。本県初記録であり、県内では今のところ他には見つかっていない。この種は全国的にも、湿地の埋め立てや開発によって、ますます減少していくおそれのある種の1つである。

ヤナギヌカボ

＜ホソバイヌタデ＞ 形状は、いわゆるイヌタデ（アカノマンマ）の大きいものにやや似ているが、葉の裏面に盤状の腺点があり、花は桜桃色で標本にしてもその美しい色が残り、花被にもまばらに腺点がみられる。ホソバイヌタデという和名は、イヌタデの細葉型を予想させ、あまり良い名とはいえないようである。本種は北海道・関東地方・朝鮮・中国・ウスリーに分布するが、日本での分布は少なく、おもにヨシの生えるやや湿ったところにみられ、日本海側での発見は今回が初めてのようである。この標本は、1984年11月17日に福井市深谷町の林道で採集し、副標本を京都大学の標本室に納めていたものを、植物生態研究所の土屋和三氏によって確認されたものである。

ホソバイヌタデ

幻のスミレ属2種

＜アケボノスミレ＞ 本種は北海道の南端から本州の太平洋側をとおり、近畿・中国・四国・九州および朝鮮半島・中国大陸に分布するが、本県では昭和8年（1933）の福井県生物目録に〈大野、坂谷〉に産すると記録されているだけであった。しかも、この記録のもととなった標本は焼失して現存しない。それ以後も本種が県内で採集されたということは聞かず、本県では幻のスミレであった。今年に入って、医師であり本県のスミレ研究家である白崎重雄氏より、アケボノスミレがあったという連絡をいただき、早速現地の和泉村九頭竜湖付近に出向いたところ、間違いなく本種の自生を確認することが出来た。本種はスミレサイシンよりも花期がややおそく、水はけのよい陽地を好み、葉が円心形で托葉は淡色、花は紅紫色で美しい。

アケボノスミレ

＜ケマルバスミレ＞ 本種は本州・四国・九州にみられるが、本県では珍しいものである。昭和8年の福井県生物目録には記録がなく、福井市立郷土自然科学博物館に、昭和30年5月1日に堀芳孝氏が和泉村大谷で採集した標本が1点あるだけであった。また昭和30年3月発行の福井県博物同好会会報第2号に同氏によりマルバスミレ（ケマルバスミレの無毛品）を丈競山で採ったという報告があるが、しかし、この標本は所在不明である。その後は両種とも本県では採集されたことがなかったが、前記アケボノスミレを調べにいった本年5月14日、偶然にも同じ和泉村九頭竜周辺のやや湿った渓側に見出すことができた。実に35年ぶりの確認である。本種は花時には葉が円形で小さく、花は白色でツボスミレと見誤りやすいが、葉や茎には毛が多い。

ケマルバスミレ

（若杉　孝生）

入館者の声

4月13日から6月3日まで「恐竜時代―日本と中国」展を開催しました。この特別展では、化石を通して恐竜時代の空・海・陸を復元するとともに、中国で発見された恐竜化石と日本の化石を比較展示しました。恐竜ブームもあって、約4万人もの観覧者がありました。期間中、入館者のみなさんにアンケートを実施したところ、つぎのようなご意見がありました。

●福井県にも恐竜が住んでいたなんて、夢があります。

●アロサウルスの骨格標本を見たのは初めてです。その迫力には驚きました。遠方からやってきたかいがありました。

●中国で発見された化石をみることができてよかったし、とても迫力がありました。

●子どもたちにわかりやすいように、説明文を簡単にしたり、イラストやマンガを多く取り入れてほしかった。

●展示場所によっては、イメージを高める効果音を取り入れてもよかったと思う。

●ビデオコーナーでは、子ども向けの番組がほしかった。

●実際に恐竜化石にさわれてよかったが、もっとその数をふやしてほしかった。

●化石の一部から、それがどの恐竜の部分であるかを判断する方法についての解説があればよかった。

●今後の調査で、数多くの恐竜化石が発見されることを期待します。

ビデオライブラリーから

かわら ―北陸瓦作りの歴史―

北陸地方では、白鳳時代にはじめて仏教寺院が建てられ、その屋根に葺く瓦の生産も始まりました。この段階の瓦作りは、畿内から技術を移入して、地方豪族の動向や律令制下の地方行政など、政治的な背景のもとに展開しました。したがって、律令制が衰退にむかう平安時代には、瓦葺の古代的な寺院の多くは衰退し、瓦作りも一旦途絶えてしまうのです。

時をへて、織田信長が朝倉氏などを滅ぼし全国を統一すると、信長や秀吉の家臣らは盛んに城館を築き、近世の瓦作りが始まりました。この時期には、全国で「いぶし瓦」と呼ばれる灰～灰黒色の瓦が作られましたが、これは水分を吸収しやすく、北陸以北の寒冷地では凍害を起こして長持ちしませんでした。そこで越前では、江戸時代のはじめごろに、越前焼の技術を瓦生産に取り入れ、表面に酸化鉄溶液を塗って焼いた「赤瓦」が新たに考案されました。

越前の赤瓦生産は江戸中～後期に隆盛を見、その製品は遠く日本沿岸の各地にもたらせれ、さらに瓦職人が赤瓦の技術そのものを伝えて各地で赤瓦作りが行われるようになりました。

この番組では、北陸の瓦作りにたずさわった人々と彼らの技術をたどることにより、その時々の社会の情景まで描いています。　（久保）

越前の平安彫像

福井県の越前地方は、若狭地方に比べて古い時代の彫刻の遺品が少ないとされてきましたが、近年少しずつ調査が進み、平安時代にまでさかのぼる遺品がかなりの数見出されつつあります。そのようななかで、この番組は、越前の南部・南越地域を中心に平安時代の遺品を紹介しようするものです。

南越の中心の武生市は、かつて越前国の国府がおかれていた所です。また武生市の南東部に位置する日野山は神体山として信仰をあつめてきた山であり、同じく、鯖江市と福井市の境の文珠山も泰澄伝承を持つ信仰の山でした。さらに武生市の東方・今立町にはかつて越前の白山信仰の拠点の一つ・大滝寺があり、武生市の北西・朝日町には、同じく白山信仰の拠点・大谷寺やかつては応神寺と称した八坂神社があるという具合に、国府を中心としたこの地域には、それぞれ古い信仰の歴史を誇る寺社が多くみられます。このような特色を持つ地域の遺品を9世紀半ばの中央作として注目されるが大滝・神宮堂・虚空蔵菩薩像を始めとして、12世紀までの優れた遺品を紹介しています。大きな寺社だけでなく、村の小さなお堂に古い仏像がさりげなく祀られていることなども、この地域の信仰の歴史を支えてきたものの深さを示唆しているのかも知れません。　（長坂）

さがしています
みなさんの身近にこんな資料はありませんか？

みなさんの身近にある資料が、福井県の歴史や民俗を知る大きな手がかりとなります。博物館では、このような資料の情報をおまちしています。

瓦・赤煉瓦

江戸時代の瓦や明治時代の赤煉瓦をさがしています。一見瓦礫のようなものが、当時の地場産業を知る上で、たいへん貴重な種類となります。

① 表面に赤・茶色の釉を塗った瓦
② 銘文の刻まれた鬼瓦
③ ①や②の瓦がまだ葺かれている建物
④ 建てられた年代のわかる赤煉瓦の建造物
⑤ 瓦や煉瓦を焼いた窯跡

広告・領収書

明治～大正期の会社や商店、役場の広告・領収書などをさがしています。

活字で印刷され、当時は大量に発行されたものでも、今日ではほとんど残っていません。たった一枚の紙切れから、本県の商工業や行政の歴史の意外な事実を発見することもあります。

・交同社（活版印刷業）の領収書［明治23年］
・戸長役場の租税受取証　　［明治18年］

川の民具

川は仕事の場、遊びの場、そして祭の場として人間の生活に大きく関ってきました。川との親しい関係が薄らいだ今こそ、人と川との係りを考えたいと思います。

①川舟関係の資料　　舟、かい、筏のかいなど
②川漁関係の資料　　エバ、網、ヤスなど
③洪水、水防関係の資料
④信仰関係の資料　　灯籠、精霊船など

福井県
ふくいミュージアム
NO.18
1990.9.30発行
編集発行　福井県立博物館
福井市大宮２丁目19―15
〒910
☎0776―22―4675(代)
印　刷　出口印刷株式会社